
熟年法事件

ただ書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熟年法事件

【Nコード】

N2403Y

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

現代日本のような現代日本ではない国でのこと。

七十歳以上の国民の財産を国が没収することなどを定めた「熟年法」が施行されてから約二年。

老人たちによる抗議活動に憔悴した首相のとり行動とは……。

※「たんたん」とショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

地上八階の窓の少ないビル。

その最上階、胸の高さにある数少ない窓のひとつから、首相は腰を屈めて門の前に集まる人ばかりを見下ろした。

「今日も老人たちですか」

「ええ、いつものです」秘書官は正面のコンピューターの画面から目を離さずに答えた。

「毎日飽きないものですね。彼らの気持ちは大いにわかります。わたしたちも苦渋の決断でした」首相は窓から顔を離し、秘書官を見てさらに続けた。「なんとか理解してもらわないと」

「そのわたしたちの苦渋の決断のおかげで、老人たちには時間も体力も十分に余っているでしょうから、毎日ここに集まることであろうと発散しているのでしょう。それと、老人たちは理解していないのではなく、気に入らないのですよ」秘書官はちらりと首相を見てから、またすぐに眼の前の画面に視線を移した。

「わかっていますよ。なんとかして不満や怒りを収めてもらいたいということですよ」

「それは無理でしょうね」

二年ほど前に施行された高齢者救済に関する一連の法、それはまとめて熟年法と呼ばれている。

資本主義国家という名目のある国において、その法案は当然否決されるものと思われていたが、議会、および、国民投票の結果、賛成多数で可決された。

要点をまとめると以下のような法である。

・七十歳以上の国民の財産を国が没収する。以降は、七十歳になった時点で財産を没収する

- ・七十歳を超えて成した財産は、没収の対象とはならない
- ・七十歳未満で子などに財産を相続する場合は、相続税を軽減する
- ・七十歳以上の国民には、家族（配偶者、および、未成人の扶養家族）の数に応じて、無償で適当な広さの住居が提供される
- ・七十歳以上の国民の医療、介護、公共の交通機関の利用などにかかる費用はすべて無償である
- ・七十歳以上の国民には、前々年度の公務員平均給与の六割相当の年金が毎月支払われる

反発も多かったのだが、一方では老後に十分に余裕を持った生活ができることから、多数の支持を得たのである。
そして国の経済は活性化しつつあった。

熟年法が施行されてから二か月後、当時の首相が急死し、副首相だった現首相がその座に就くと、老人たちの憤慨の矛先はこの首相となった。

議会場や執務室のあるこのビルに、首相の自宅に、連日老人たちが押しかけ、怒号を上げて罵声を浴びせる。

脅迫めいた電話が引つ切り無しにかかってくる。

一日に何千通もの電子メールや手紙が届く。

いくつかの反対意見、といってもその多くは感情に理屈を薄く重ねただけの意見だが、それを取り出しては、それに対するコメントをマスコミを通じて、あるいは、インターネット上で公開する。

首相は政治家のくせに真面目すぎるし、人が良すぎる。この首相と十年近くの付き合いのある秘書官は、首相のことを常々こう思ってきた。

首相になってから約一年半。首相はひどく痩せ、肌や髪からは健康的なつやが失われ、ずいぶんと老けこんでしまった。

「わたしだってあと十年。明日は我が身です。わたしは今すぐにでも引退してあちら側に行きたいですけどね」こう言って首相は自嘲

した。「昼食にしようか」

首相は、首相になって以降、妙に優しくなった妻が作った弁当を広げ、秘書官も同様に弁当を広げる。

以前は外食をしたり、誰かが手配した弁当を食べたりしていたのだが、いつの間にか両者とも家族の作った弁当を食べるようになっていた。

そしていつも通り、首相は、食べながら電子メールや電話、手紙で届いた意見をまとめたデータを確認する。

「最近是三行程度読めば何が書いてあるのかわかるようになってきましたよ」

「どれも同じようなことしか書いていませんからね」

「そうですね。責任を取れだとか、辞めろや死ねが多いですね。これではわたしもいつか殺されてしまっかな。まあ、その時は君や他の者を巻き添えにしないように気をつけますよ」

前首相は、睡眠薬の過剰摂取により死亡したのだが、それは暗殺とも言われていた。

「まずは自分が自分に殺されないように気をつけてくださいよ。最近はこちらと寝ていますか」

「まあ、そこそこにですね。いっそ死んでしまった方が楽なのです……」

秘書官は、その言葉には何も言わず、一口大の鶏の唐揚げを口に突っ込んだ。

辞めてしまいたい、死んでしまいたい、こういう気持ちはわからないでもない。そのストレスは自分では想像できないほどだろう。しかし、今この人物以外に首相を務められる者はいない。秘書官は、昼食の時間すら、このようなことをしている首相を哀れんだ。

秘書官と同様の目でこの首相を見ている国民も大勢いた。健康的で実際の年齢よりも若く見られる外見。口数こそ少ないが、口を開いた時は熟考した言葉をはっきりと伝える。前首相の側にあっては有

能な補佐としてのイメージが強く、国民の人氣が高かった。トップに立つタイプの人間ではないのだが、前首相の死後、周囲の議員たちもマスコミも、当然彼が次の首相になるものと考え、皆が望むならと首相に就任した。

就任以降、見る間にやつれていく姿。国民の声をいちいち拾ってはそれに対するコメントを出す生真面目さ。この首相を哀れみ、応援しようという国民は多かった。この首相だからこそ、現在は一部の老人たちが騒いでいるだけのことで済んでいるのだ。

「不満の声も外の老人たちも、ずいぶんと減ってきましたよ」秘書官は弁当を食べ終えてから首相に言った。

「そうですか。そんなに減ったようには見えませんがね」そう言って、首相は再び窓から老人の集団を見下ろした。「あれを一掃できたらいいのですが……」

「それは無理でしょう。批判というのは必ず出てくるものですから」
「彼らの前で責任を取ると言って死んでやりますか。そうしたら彼らもいなくなるかもしれませんよ」

「そういうことは言わないでください。あまり気にせずに」

「でもね、わたしも本当は辞任したいし、死んでやりたいですよ。しかし辞任なんてそれこそ無責任ですよ。あの老人たちを後任に押し付けることなんて、とてもじゃないができませんよ。もちろん死ぬことも無責任。だから事故にでも遭えばいいのにと考えるんですよ。突然隕石が降ってきてわたしの頭に当たってくれないですかね。これも無責任な考えですが」首相は淡々と言葉を続けた。

「そう簡単に隕石は降ってこないでしょうね。さあ、十五時からの会談は忘れていませんか。そろそろ準備をしましょう」

首相の乗った自動車に数十人の老人たちが殺到し、警備員たちがそれを制止する。いつもの光景だった。

汚い言葉が投げつけられ、石や杖、靴までも投げつけられる。金返せ。

止まれ。

辞めろ。

責任取れ。

泥棒。

くそじじい。

死ね。

その声を聞いているのか、目を伏せ、暗鬱な表情をした首相を乗せた自動車は、すぐにその場を通過して行った。

「気にしないことです」秘書官がこれもいつも通りの言葉を首相にかけた。

首相がホテルで外国の大使との会談を終えると、出入口付近で十人前後の報道関係者が取り囲んだ。

昔はこうして記者たちに囲まれることも好きではなかったが、あの老人たちに比べれば楽なものだ。先ほどの老人たちを思い出し、首相は軽く微笑んだ。

記者たちの質問に答えて、会談の内容を簡単に話そうとした際、首相の背後から突如大きな声が上がった。

振り返ると、老人がひとり叫んでいる。ホテルの宿泊者のように見えた。

「金を返せ。おまえはこんな場所で飯を食いやがって。おれらの金だ。責任を取って死ね」老人はそう叫ぶと、懷中から短刀を取り出して鞘を投げ捨てた。

すぐに数名の警護官が取り押さえに向かうと、どこからか二十名余りの老人たちが躍り出て、警護官に飛びついた。

短刀を持った老人は一直線に首相に向かう。首相は、殺されてもいいかと諦観し、老人を、その手に持つ短刀を見つめて、微動だにしなかった。

警護官に飛びついた老人たちが「天誅だ」「泥棒め」「万歳」と口々に叫ぶ。

警護官や記者たちも「ふざけるな」「何をしている」「取り押さえろ」と声を荒げる。

短刀を持った老人が首相の眼前に迫る。

諦めたはずの首相の体が、今さらになって老人を避けようと動き出す。

それも間に合わないかと思えた瞬間、首相の側にいた秘書官が老人の体に体当たりをして吹き飛ばした。

そのまま秘書官と老人は倒れこみ、短刀が首相の足元に転がった。記者たちから拍手があがる。

首相は短刀を拾って、今は警護官に押さえつけられている老人たちに向かって数歩近づいた。

そして突如叫び始めた。

おれが死ねばいいのか。

おれが死ねば満足か。

おれが死ねばもう来ないのか。

おれが死ねば黙るのか。

おれが死ねば電話もしないか。

おれが死ねばそれでいいんだな。

二度と来るな。

何も言うな。

何もするな。

死んでやるからもう黙れ。

首相は両手で握った短刀を強く首にあてると、躊躇もなく腕を前方に引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2403y/>

熟年法事件

2011年11月13日13時21分発行